

会議録

件名	第1回軽井沢未来構想会議
日時	平成25年6月19日(水) 13:30~16:30
場所	浄月庵「一房の葡萄」

事務局 (udc) :開会 メンバー紹介

定刻となりましたので、只今より「第1回軽井沢未来構想会議」を開催させていただきます。本日はお忙しい中、会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。私は、本日の進行をさせていただきます、UDCの南でございます。よろしくお願いいたします。

では議題に入ります前に、お手元にお配りしております資料の確認をさせていただきたいと思えます。上から順番に、次第(A4版)、委員名簿(A4版)、座席表(A4版)、右上に資料1と書かれていますA3版資料、右上に資料2と書かれていますA4版資料、以上計5点が本日の資料となります。不足しているものはありませんでしょうか。ありがとうございました。

本日の会議は途中休憩をはさみますが、おおよそ3時間を予定しております。長丁場となりますが、よろしくお願いいたします。

それでは、次第に沿って議事を進めさせていただきます。

次第の2.メンバー紹介に移り、私より委員のご紹介をさせていただきます。

まず、福島大学人間文化学・黒須充様、東京農業大学名誉教授・進士五十八様、東京工業大学名誉教授・中村良夫様、筑波大学人間総合科学研究科教授・花里俊廣様、武蔵野美術大学デザイン情報学教授・森山明子様、立教大学観光学部教授・安島博幸様、軽井沢町より、軽井沢町長・藤巻進様、軽井沢町企画課都市デザイン室参与・横島庄治様、その他、早稲田大学教授の浅野光行様にも委員をお願いしておりますが、本日はご都合によりご欠席です。以上、9名の先生方に委員をお願いしております。よろしくお願いいたします。

続きまして、次第の3.町長挨拶および正副委員長の指名に移らせていただきます。

それでは、藤巻町長よろしくお願いいたします。

藤巻委員(軽井沢町長):町長挨拶および正副委員長の指名

この度は、軽井沢グランドデザインを描くための「未来構想会議」の開催にあたり、委員の皆様には快くお引き受け頂き誠に有難うございます。何卒、宜しく願い申し上げます。

このプロジェクトは、2年間で進めていきたいと思っております。また、町では都市デザイン室を設け、50年、100年後の軽井沢のビジョンを描いていく取り組みに力を入れて進めていこうとしているところでございます。その姿をできるだけ、町の皆さんに分かり易く「見える形」で展開して



いきたいと考えております。

軽井沢町は別荘地として本年度で127年を迎え、別荘数が1万5千件、人口も本年度中に2万を超える予測であり、少しずつですが、両方とも増加傾向となっています。人口増加の要因は、高速交通網の新幹線、高速道路の開通による利便性の向上、それによる滞在型から日帰り行楽地的な観光に変化した事があります。人口増加に伴う住居増加による自然崩壊も予測されますが、軽井沢町では厳しい自然対策要項を設置し、自然を守っていく事を重視しております。今後も、自然豊かなリゾートであって欲しいという想いであり、そこへ、どう結んでいくのが課題であろうと考えています。

会議は今年度、1年間で全9回を予定しております。町の予算としましては、2年間で3300万を計上して進めているわけでございます。先ほど申し上げました、町全体をどのような形で考えていくかと併せまして、各エリアデザインを同時に作っていきたいと考えております。大変軽井沢は広いので、それぞれの地区によってカラーが異なるため、地区のカラーにあったエリアデザインを検討したいと考えております。その成果品は町内、各施設に掲示をし、皆さんに見ていただく形をとり、約32枚程度で見積もっております。また、ランドデザイン像についてのパブリックコメントも募集させていただいております。今後は、これからの軽井沢を背負っていく小学生、中学生に絵や作文等で軽井沢の未来について応募して頂くことも予定しています。

軽井沢も少しずつ変わっていくべきであります。全国的にコンパクトなまちづくりやエコタウン、スマートタウンなど様々な形で計画されていると思いますが、その様な事も考えていかなければならないと思っています

それともう一つは、軽井沢の都市の役割は、今まで別荘地、観光保養の地でありましたけれど、それを継承しつつ、さらにその上に違った新しい軽井沢といいますか、そういった決め手のものを作っていければいいのかなと思っています。町内では地元会議推進協議会というの、民間団体で作られて、そういう対応に使っていただけるような軽井沢をもっともっと進めていこうというとか、そんなような動きもございます。特に何とぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

未来構想会議の委員長、および副委員長は、委員長として中村良夫先生、副委員長として横島庄治さんにお願ひできればと思ひます。よろしくお願ひしたいと思ひます。

事務局 (udc) :

ありがとうございました。それでは委員長よりご挨拶および構想の説明をいただきたいと思ひます。ご挨拶後の議事の進行については、中村委員長にお任せいたします。それでは、中村委員長よろしくお願ひします。

中村委員長：委員長構想説明

これから2年間軽井沢町の将来について健闘させていただきたいと思ひております。次第では「委員長構想説明」となっていますが、構想はこれから作るものですので、今までの経緯等をお話したいと思ひます。別件ではありますが、たまたま進士先生と一緒に軽井沢に来たことがあります。軽井沢はもともと興味があったわけではありませんが、私の祖先が信州の松代出身ということで、これから無理やり理由付ければ、縁がないわけではないので、お引き受けした次第でございます。

最初、横島先生からお話がありました。少し将来、町の将来を考えるという話は良くある事ですが、驚いた事は、この事業では軽井沢についての100年先まで考えるという事でした。50年、100年を予

測する事は、難しいです。50年、100年も先は、科学的に予測するというのも非常に難しい事です。高度成長時代、これまでも30年ぐらいの予測がされていますが、だいたい当たった試しがありませんので、100年先まで予測しても当たらないと思っています。現地を少し見させていただいて非常に強く感じたのですが、これは軽井沢のプロジェクトであると同時に、日本の50年、100年先を先行的に軽井沢から示すためのプロジェクトではないかという印象を持ちました。そのための方法は、これから皆さんといろいろ議論をしていくことになっていきますが、私はやはり50年、100年で考えますと、原点にもう1回、回帰するというのが一番現実的な方法ではないかと思っています。原点に回帰するというのは、いろいろな意味がありますが、軽井沢はご存じの通り、140年程前にキリスト教の宣教活動から始まった近代的なまちが主流となっていると思います。その後、大規模なそういう殖産興業で発展してきた町です。また、同時に皆さんご存じのように、非常に日本ではまれであります、多くの知識人、芸術家等、あるいは政治家もこの町を好んで訪れて別荘を営むという歴史がございます。この事は我々が吟味していく中で、当然話題になるかと思いますが、軽井沢という町に対する一種の精神風土、その様なものを積み上げていくと思います。それは軽井沢町の住民はもちろんですが、それと同時に軽井沢町にはある特殊な別荘住民もいます。夏だけで来る方もいますし、通年で来られる方もいます。場合によっては軽井沢から東京へ通勤する人も増えるかもしれません。この様に多様化しておりますが、いずれにしても軽井沢という町に対する思い入れが非常に強い方たちがたくさんいるわけです。そういう方々は大変心強い方です。まちづくりに対して非常に高い理想の碑を掲げている。今も町長さんから、ちょっとご紹介がございましたけれども、この事業を始めるにあたって、事務局が早々とパブリックコメントを実施致しました。通常、ある程度まとまってからパブリックコメントを実施し、反応を見るということが多いのですが、今回は開始と同時にパブリックコメントを実施しています。そのパブリックコメントは、皆さんに見ていただくことになると思いますが、提出していただいた皆さんの意識が高い事が分かると思います。将来に対する理念を高々とあげる、一種の共有主義という様な傾向が非常に強いです。これが普通の町であったら通用しないと思いますが、軽井沢だからこそ可能だと思います。これは軽井沢の皆さんに対するこれからのまちづくりの一つの勉強の材料になるかと思いますが、同時に私個人としては、これが全国のまちづくりの一つの方向を示す灯台になれば良いのではないかと考えています。

都市計画という分野では、ともすれば実務主義であり、理念の碑を高々とあげる事に対して、だいたい下降していくのが落ちであるとされています。恐らく日本の様々な意味での行き詰まりの一つの原因は、この様な事だと私は考えています。是非、軽井沢から新しい傾向を打ち出す事に期待して欲しいと、そんな風に思っております。

その様に強く感じた具体的な例は沢山あるのですが、一つ印象に残っている事があります。軽井沢は戦前からまちづくりというか、もっと広く言えば人間の共存の原点というか、そういう事を勉強する風潮が沢山あったと思います。大正7年に新渡戸稲造先生が軽井沢で夏期大学を実施され、戦中戦後少し途絶えたようですが、それがまた復活し、今でも続いているという話を聞いて、非常に驚きました。この様に勉強会が延々と続いているという事は大変珍しいと思っています。私が知っている限り、軽井沢と倉敷ぐらいです。倉敷では、戦前に大原孫三郎がまちづくりの勉強会を始めており、それが土台となって今の倉敷の伝統的な街並みの保存ができあがっています。それだけではなく、あの街を訪れて驚いた事は、そこに住んでいる方々の教養水準が非常に高いという事です。それは、物を読んだり書いたり等ではなく、生活の美学、生活のスタイルに対する教養が非常に高いという事です。

柳宗理さんが様々な活動した影響もあろうかと思いますが、飲み屋での焼き物一つとっても、コピーではなく、本物の民芸物を使っている人が多い、そういう意識の高さを感じる良い一例だと思います。それが倉敷という町を支えているのだと思います。それと同じパワーがこの軽井沢町にもあります。ですから、町の原点に返った形でそれを確認し、100年計画を検討していく事ができればと考えております。恐らく行政の事業ですから、理念だけ終わらせる事は出来ないかと思っております。最終的には理念に基づいて、第一歩をどう踏み出すかという事についても、ある程度答えを出さなければならないと思っています。今すぐに答えを出す必要はありませんので、まずは原点に戻ってという事から初めていきたいと思っています。原点とは一体何かという事については、本日、何から何まで話す準備もございませんし、話すべきではないかもしれませんが、後程、各委員の皆さんから1人ずつ少し自己紹介を兼ねてコメントをいただく時間がございますので、その時にもう少し原点なるものを説明したしと思っております。この委員会は軽井沢町の委員会ではございますが、日本のまちづくりに対して喝を入れる事になる議論ができるのではないかと期待する所でございます。幸いにこの世界の第一人者にお集まりいただくことができました。次回からは交通がご専門の浅野先生もご参加いただける事になっております。今日は天候が不純ですが、お集まりいただき誠に有難うございました。取りあえず挨拶を兼ねてお話しさせていただきました。後程の機会に、もう一度続けて説明させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

それではこのまま続けさせていただいてよろしいですか。お手元に会の議事次第がございますので、それに添って進めさせていただきます。最初に軽井沢町の現況説明でございます。ある程度、軽井沢町については知っているつもりでおりますが、改めて事務局から現況説明を20分程度お願いし、その後で皆さん、自己紹介を兼ねてお話しさせていただきたいと思っております。

それでは軽井沢町の現況説明をお願いします。

軽井沢町の現況説明（軽井沢町企画課都市デザイン室/森室長）

中村委員長：

どうも有難うございました。この後委員の皆さんから少し自己紹介を兼ねてご挨拶をお願いしたいと思っております。今の森さんのご説明に対して何かご質問はありますでしょうか。また検討する過程で、この話については当然出てくると思っておりますので、その時に議論したいと思っております。それでは森さん、どうも有難うございました。

それでは目次に従って進めてまいります。委員の皆さんからそれぞれ今後の作業に対する要望、や改善、軽井沢の感想等を含めて、自己紹介していただきたいと思います。今日は第1回目ですので何でも結構です。お一人20分ぐらいということで、委員名簿に添ってお願いしたいと思います。本日は交通工学がご専門の浅野先生はお見えになっておりませんが、次回からご出席頂く事になっております。それでは、黒須先生からお願いします。

委員からのそれぞれの基本スタンスのプレゼンや作業への要望

黒須委員：

あらためてご自己紹介させていただきます。福島大学の黒須と申します。スポーツ社会学を専攻、研究分野にしております。軽井沢というとハイソサエティの人たち、文化人が集まる町という印象を

持っておりましたので、汗臭いスポーツ世界に身を置いている自分とはもう一生縁のない場所ではないかな、そんなふうにも思っておりましたが、このたび横島先生から、お声掛けいただきまして、休暇ではなくて仕事で軽井沢に行くことができるという事で、二つ返事で来させていただきました。どうぞよろしくお願い致します。

先程、中村委員長からのお話の中で、原点に回帰するという事があがっておりました。スポーツの原点を考えてみますと、やはり遊びという遊び心、人間は遊ぶ人、ホモ・デンスという風に言われておりますので、そういった事からスポーツの原点とまちづくりというものを考えてみたいと、先程のお話を聞いて感じたところです。もう1点はスポーツというものは、人と人、人と社会、国と国をつなぐ、とても親和性の高い文化の一つだと言われております。ですから、スポーツと教育であったり、スポーツと医療であったり、スポーツと福祉、スポーツと産業、スポーツとツーリズム、観光、スポーツと住生活、そしてスポーツと地域づくりという形で、必ずしも、体を動かすという様な狭い意味でのスポーツではなくて、もっと色々なものをつながっていく、そういったスポーツの役割について何か私の研究の分野からお話をしていければと思っております。今一番関心を持っているのは、地域のコミュニティーに根ざしたスポーツ環境の育成ということで、先程もスポーツコミュニティー軽井沢クラブの方からも、少しお話をお聞きしてきました。そういったスポーツとコミュニティーという様な事についても、この会の中で少し私の意見なども述べさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

中村委員長：

有難うございました。それでは進士先生お願い致します。

進士委員：

シンジイソヤと読みます。どうぞよろしくお願い致します。少し分からないので先に伺いたい事があります。中村先生からお話を聞きまして意のある会ですので、出来るだけ出席したいと思っておりますが、今後はどの様なスケジュールで進んでいくのでしょうか。事務局から頂いたスケジュール表があるのですが都合が悪くて来れない日もあります。

中村委員長：

後であらためてご説明申し上げますが、今日は第1回です。原則として1ヶ月に1回は会議を開催したいと考えています。9月は軽井沢町の方が議会等で様々な行事がありますので、会議はありません。次回は8月に予定しています。

進士委員：

そのスケジュールは頂きましたが、毎回違うテーマが出てくるのでしょうか。

中村委員長：

それもお相談ですが、会ごとにお一人ずつ、あるいはお二人ずつ先生方に、ご専門のお話をさせていただいてディスカッションするという案もあります。その時間割りについてはこれから検討する事になっています。今年はず先生方からご専門の話を聞いて本格的なディスカッションを行い、



その後には作業班とまとめていく方向で考えております。まず、はじめの数回は、皆さんの話を本格的に聞く会をやりたいと思っております。

進士委員：

それでは、あらためてお話しする機会がある事ですので、自己紹介をさせて頂きたいと思います。

私は造園というマイナーな世界を専門としていますが、でもいろんなことをやる仕事です。軽井沢は確かに何回も来ているのですが、私はあんまり上品ではないので、軽井沢的じゃなく部外者的かもしれませぬ。しかし、感じることはたくさんあります。例えば、この建物は良い雰囲気なのですが、少し室内が暗いと感じます。それは周辺の樹木が十分に成長し過ぎているからです。この部屋の中と対応する必要があるので、全部を緑で囲めば良いという事ではなく、囲まれている部分と、解放されている部分がないと駄目です。そういう簡単な話で言えば、先程、自然保護要綱について、建坪率と容積率を抑えていると盛んに説明されていましたが、300坪のロットの大きさで自慢することは何もないと思います。戦前の昭和10年代ぐらいの東京の郊外住宅は、大体がみんなその程度の大きさです。ですから、少しもリゾートではないと思います。郊外住宅です。他の自治体と比較しながら考えるから、軽井沢が相当厳しく行っている様に言うのだと思います。確かにその通りで、比較的には厳しいとは思いますが。しかし、先程、中村先生がおっしゃった様に、まさに100年先のこれから日本の人口がどんどん減り、高度成長する必要がないという時代の都市のあり方のモデルを考えるという事ですので、企画しながらやるみたいな発想の意味はないと思います。先生がおっしゃった事に、私は大賛成です。まさに哲学をもって、どの様な地域づくりが一番良いのかを考える事が良いと思います。もちろん住んでいる方が主体ですので、その方たちの賛同を得ないといけない範囲で考えなければ、ただの理想になってしまうかと思えます。ただ、今までの様に比較する事は意味がないと思います。また、こうやって先生を集めると、だいたいみんなバランスよく意見が入ってきますが、これもつまらないと思います。専門家を集めるとご自身の専門が一番大事だと主張するため、ここも問題だと思えます。これまでの色々な地域計画はそこも問題になっていたと思えます。この町にとっては何が一番大事かという事があるわけですし、それ以外は捨てるとか、10分の1くらいは見るとか等の判断が必要になってきます。そのやり方や進め方も考えたらいいと思います。

少しつまらない言い方して申し訳ありませんけど、この天井をさっきずっと見ていて、これは木目が全て同じなので合板ではないかと思うのですが、どうですか。

森山委員：

これは合板です。

進士委員：

この様な場所で復元すると、天井等は色を塗ってしまいますので、だいたいはっきりとなじむ感じにはなりません。先程の景観基準で、恐らくある一定の範囲で明度や彩度を落とし、色相等も設定されているのではと思います。その様にしてしまうのです。建材は塗れば何でもきれいな色が出せ、素人は良いなと思います。しかし、本物ではないので、ずっとここに暮らしていれば、安っぽいと感じるのではないかと思います。本物はムクの木だと思っています。合板は機能的で丈夫ですし、建築基準法上も問題ないですが、クオリティーを求めるならば、そこまで考えるべきだと思っています。もちろん場所によりけりだとは思いますが、その辺のスーパーマーケットまで本物を求めるべきだとは言っていないませんが、選ばれたキャリア性を名乗るならば、その程度の事は考えて修復したり、復元したりするべきだと思っています。本物性をどの程度考えるかという事だと思っています。行政の基準は、全て一

覧表にするのですが、数字で決めているから良い、予想より厳しい設定だから十分やっつけていると言いますが、最後は質です。開発許可したものが町中に並んでいるわけなので、今のままで良い部分と、良くない部分はしっかりと点検すれば、今度どういう網をかけて、どういう指導をすれば良いのか、大体の目途はつくと思います。景観賞を出したりして頑張っておられるのは、一つのテクニックだと思います。景観賞は全国で実施されていますが、そんなに良くはならないと思います。私はあまり品が良くないので、はっきりと思っている事を言うのですが、中村先生がおっしゃったことは、すごく大きいテーマだと思っています。先生とは古賀公園以来となりますが、今度は軽井沢をそういう思想で再度まちづくりをやってみせるという、そのぐらいのものだと思います。

ですので、その様な思想を目指すのなら、逆に本気で組み立てを考える事が重要だと思います。結論だけ言いますと、自然と開発の調和ではキャパシティを決めれば良いと思います。今の2万戸をどこまで延ばすのか、ロットにして割っていくと入る量は見えてくると思います、3万なら3万で打ち止めする等のキャパシティを決めてしまう事もあると思います。それで自治体の経営が成り立つのか、今職員が何人いて、これからどうなのか、税収との関係でどのぐらいまでなら行えるのか、そういう様なユニークをしっかりと立てて、適正規模でこの町の経営をする等もあると思います。そこにはどの様なスタッフが必要なのか、小野寺さんやスタッフが役場に入って、中村先生の思想を実現するまで頑張るぞというものが無いと、そういう人がいないと駄目だと思います。役場が安定した職場だから、なんとなくやっているようでは、多分そんなにすごい事はできないと思います。

しかし、やりがいのある町だという事は間違いないと思っています。全体像を持ちながら、ある思想をきっちり打ち出してやるという意味では、心から大賛成で期待しております。

中村委員長：

有難うございます。スケジュールの事については、後ほどもう一度検討をさせていただきます。進士先生からお話でしたが、それぞれご専門の第一人者ではありますが、100年後ですので、なるべく専門にとらわれずに十分ご発言をいただければと思います。

それでは続きまして、花里先生から一言お願いいたします。

花里委員：

私は建築の建築計画専門となります。その中でもマンションの研究をしております。先ほど森さんからお話いただきましたこの町の敵のようにされている方の研究者で申し訳ないなと思っていますけれども、個人的に10年前、軽井沢町に山荘を作った事から関わりが始まるようになりました。それから、いろいろ人に会ったり、町長さんにもお会いする機会が何度かあり、この町の環境のポテンシャルは高いという事はよく理解しておりましたので、どういう風にしたら良いかと個人的にも活動しています。最近では、ウィリアム・メレル・ヴォーリズという建築家がデザインした「アームストロング山荘」の修復に関わっています。100年は経っていないと思いますが、80年か90年ぐらい経っている建物です。旧軽井沢の浅間隠しの方にございますので、機会があれば皆さんにご覧いただけたらと思っています。

この町は別荘の町と思っています。これを100年後も続けられるかどうか、この町が上手くやっつけていける秘訣だろうと思っています。進士先生から言われましたが、2万戸か3万戸になったら打ち止めにする事を含め、別荘の町であるという事、別荘はどういうものであるかっていう事を、外部から入ってくる方に対してもしっかりと伝えながら、かつ新しく入ってくる方にとっても、入ってきや

すくするような事が必要ではないかと思っています。少し高いから大変だと思いますが、毎年のように新しく入ってくるような方がいるようです。そういう方たちに対してもフレンドリーであるような形で、別荘の町が推移していく事が良いのではないかと思っています。

今日は町の森さんから自然保護要綱の説明をして頂きましたが、歴史の歴がまるでないと感じました。100年先を語るのであれば、100年前からの歴史を語るべきではないかと考えておりますので、今度の機会に歴史のレビューを是非していただきたいと思います。軽井沢は2万戸という事ですから、日本でも数が多い別荘地の一つだと思っています。歴史上では、日光や箱根の別荘の方が古いといわれていますが、軽井沢でも100年程前に別荘地が愛宕山に開発され外国人が分譲されたという事があると聞いておまして、ここが一番古いのではないかと勝手に思っています。

また、別荘の固定資産税は町にとって大きな財政源になっている事ははっきりとしています。その点からみても、別荘の町という事は決して消せない話かなと思っています。

軽井沢には軽井沢避暑団という大正年間ぐらいにできた自治組織がありました。日本人と外国人が半々程で、別荘のあり方がどうあるべきか等を話し合っていました。外国人の方は、宣教師の人たちだったため、少しお堅いところがあったかもしれませんが、それがあった事で今でも軽井沢の環境が守れているところがあります。そういった歴史もございますので、レビューはすべきだと思っています。

それからもう一つ、建築家の磯崎新の別荘でお話を聞く機会があったのですが、非常におもしろいです。山手の方にはご自身が設計された辻邦生と佐藤先生の別荘があります。5軒ぐらい建物が並んでおり、ご自分では「バラックパルテノン」というふうに言っておられます。バラック作りのパルテノン神殿だというようなニュアンスだと思います。この様な別荘があるのですが、磯崎さんが公表していない事もあり、知られておりません。軽井沢にはまだまだ埋もれている別荘があるはずだと思っています。建築的な興味から申し上げましたが、こういった別荘等もどうやって活用していくか、どうやって保護していくか、これも差し迫ったことの一つだと思っています。

中村委員長：

どうも有難うございます。歴史のレビューは私も同感です。後ほど私からもお話ししますし、事務局の方でも資料をご用意してございます。それでは森山先生お願いいたします。

森山委員：

私が生まれて育ったのは隣の新潟なので長野とは地続きですが、軽井沢は別世界のような印象を持っております。長野とあまり深いかかわりはないのですが、直近では長野オリンピックの委員をやっていた関係で来させていただいています。

銀座、京橋、日本橋に明治時代のガス灯の意匠を持った街路灯があるのですが、何十年か前に、国際コンクールを実施しました。中村先生とはその時以来となります。中村先生が委員長で私が副委員長でした。その選考にあたって、一つ私なりに決めたことがありました。コンペは図面ので出てくるので、相当奇抜な、人を驚かせる案ではないと一等になって実現はしないのですが、その様な作品は選ばないと決めました。もっとも目立たせず、もっとも精度の高い可能性があるものを選びたいと決めておりました。それに該当する作品が1個だけありました。銀座に街路灯が建ったのは、私たちが思っているより相当早く、まだ明治1桁の時代になります。そのときのガス灯というのは最先端の技術

でつくられたものです。ですから、もっとも目立たず、もっともプライマリーな形をしていて、しかも技術的にはできる限り、先に進んだものを選びたいと思っていました。政治的に様々な荒波があったのですが、幸い中村先生をはじめ、そのときのメンバーは、同じ考えを持っていたり、割りとしんとする方々でしたので、何とか実現しました。実現した時はほとんど反響が少なかったのですが、私はとても成功したと思っています。一つは良いとか悪いとかで話題になる事がデザインの価値であるという考え方もあると思うのですが、固定されたもの、そんな簡単に変わる事のできないものについては、じっとそこにあったかの様であって、かつ新しきものであるという事も一つの考え方だと思っています。その事はコンペでは非常に珍しい事なので、誰も褒めません。応募された日本を代表する建築家、デザイナー、プロダクトデザイナー、景観の専門家は、われこそが一番と思っていますので、全ての方が我々の敵でした。実現したお1人以外は中村先生のこと私も私のことも、全く認めておりません。あんな作品を選んでと思っていると思います。デザインについて、そういう側面があるということ、昨今あまり言われていません。デザインで何か世の中が変えられる論調が多く、一部のデザイナーがスターの扱いです。そういう世界や人がいなければ、優秀な若い人材が目指してプロ野球やサッカーに来ないではないかという事を大学の先生はよく言うのですが、まあそれはそれです。それはそれであって、それとは違う側面の方が多いということ、私は言いたいし、この未来構想会議に望む姿勢でもあります。

私は社会環境デザインという授業をやった事もありますが、それが専門ではなく、単なるデザインジャーナリストです。今、「アートを起用する」というと、自治体で多分話題になっているのは、新潟県の妻有のアートフェスティバルだと思います。私の生まれた所と割と近くですが、アートとは無縁の農村地帯、超過疎地帯を舞台に海外や日本からの有名なアーティストの作品を持ってフェスティバルを行い、活性化を図るというものです。確かに活性化した面もあります。それから瀬戸内や瀬戸内海の島を舞台としたアートもあります。いろんなケースがあり、「アートの力」と言うのですが、私はあれが成功した本当の理由は、別にあると思っています。

妻有のフェスティバルは私も実際に見ました。山奥や谷や田んぼにモダンアート以降のアートが設置されているのですが、その隣にたまたま積みわらがありました。そこには崩壊した住まない家の土塀や塀のようなものの破片がピラミッドになって重なったものもありました。現代アートが設置される事で、その空間にある自然にあるもの、自然が破壊したものも、もしかしてアートかもしれないと思う事です。これは作品かもしれないと、みんなが今まで見向きもしなかったものを見るようになるということが、あれらのイベントが成功している理由であり、長く継続的に開催されている理由だと思います。アートそのものの価値がないとは決して思っていませんが、本当はそういう価値ではなく、アートによって照らされたそこにある森羅万象全ての方が、実はアートの高価な輝きを持っていたのかもしれないと思っています。

私もデザインやアートについて、少しは考えていたのですが、この信濃毎日の50回の記事を見させていただくと、上手くいってるとは必ずしも思わないのですが、私がいろいろと考えていた事は、ほとんど少しずつですが行われていました。アートとデザインについては、そういうふうに考えたいので、この会議の中心的なお金を使う命題に取り上げないでいただきたいと思います。それよりは、農地や植生の方が大事であり、下支えをするという役割のジャンルにしていきたいと思っています。以上です。

進士委員：

私は賛成だから言わせていただきますが、十日町は、峠の棚田のところだけ一切入れていません。結局、本当に一番良い場所には、作家のアートは入れていません。棚田の石垣をきれいに積み、あれはアートだと本人も説明している作家もいます。ロシアの作家が12カ月の農作業を手伝い、棚田を作成したこともあります。それは、農民の一生涯に共感したからだと思います。言ってみればきっかけを作っただけです。本当そうだと思います。

中村委員長：

荒廃したところもアートになっているのですか。

進士委員：

荒廃というよりは、大自然、2次自然だと思います。農村というのは大自然ではなく人間化した自然なので、人の手を全部感じるわけです。杉の森も棚田の石垣組もそうであり、そういうものがあそこにあるだけです。その様な場所にアート設置した事で、人間が自然と戦ってきたその様な風景を、いわば都会のミーハーは喜んで、そうだそうだと言っているのだと思います。

中村委員長：

それでは、先に進ませていただきます。安島先生お願い致します。

安島委員

立教大学の観光学部というところにおります安島です。私の専門は観光地、リゾートの計画です。中村先生と同じ東京大の社会工学科にまだ助手でおりました頃がちょうどリゾートブームでした。83~86年頃になるかと思います。1987年にリゾート法ができる前からリゾートの時代が来るということで、その研究をしようということになりました。その当時、民間企業の方等は、フランスのコートダジュールやオーストラリア、ハワイ等の様々な先進地に調査、事例研究に行っていました。私ももって行って研究をしたかったのですが、なにしろ研究費が足りなかったので、歴史の研究をする事になりました。日本の別荘地が、どのように生まれてきたのかということについて研究をしました。いろんなところで研究しましたが、軽井沢については、研究者が非常に多く、たくさんの本が出ておりましたので、あまり細かくは研究しませんでした。しかし、なぜこの別荘地を作ったのかという事を、歴史から学ぶ研究はいたしました。涼しさを求めたという事は当たり前ですが、一番大事な事は、交流ではないかと思っています。いろいろと場所を変え、交流をするという事が別荘地の非常に大事なテーマだった事が一つの結論です。その他では、健康ということ。健康のためにリゾートを求めたという事です。あまり言われておりませんが、日本では戦前、結核はなかなか治らない病気で、それに対する恐れは非常に大きかったと言われていました。企業の保養所がある場所で、お休みの間は生活をするという事も非常に大きかったです。あとは、新しい文化的な生活に対する憧れという事があると思います。当時の日本では和風住宅がほとんどで、畳、ちゃぶ台で生活していたと思いますが、別荘には椅子とテーブルの生活もありましたし、軽井沢では自転車が流行ったり、電話とか電信なんかも非常に早く出来ていました。当時のアパート式の鉄道に乗って高原に来る事は、当時の人の目になってみると、とってもワクワクすることが、たくさんあったのではないかと思います。そういう当時のワクワク感がリゾート、別荘地の価値だったと思います。そういうものが、今どういう形で残っているのかを含めて、考えていくべきなのではないかと思っています。先ほど花里先生がおっしゃったように、100年後残るとすれば、やはり別荘地だと思います。軽井沢の魅力は、ここに長いこと住ん

できた、別荘に住んで来た方たちが作った文化、環境とかだと思います。そういう方たちの生活文化というものをいかに支えられるかという点が非常に大事ではないかと思っています。軽井沢銀座には、少し昔まで、横浜シルクやミキモト等お店があったと思います。デパートですと三越もあったと思います。今でも昔からあるパン屋等が残っておりますが、別荘の方たちの望む高度な文化的な、生活に必要な店が、今どんどん失われかけていると感じており、非常に心配をしております。

失われていくものを守る事と変なものが出てきたりしないようにコントロールする事は必要になってくると思います。軽井沢の他にはない特徴として、美術館が多い事と、貴重な建築物が多いという事です。ヴォーリスの建築の宝庫でありますし、レイモンドの建築もあるとおもいます。今の現代の建築家では、磯崎新や、清家清、吉村順三の別荘もあります。この様な貴重な建築物の保存も必要だと思います。それから最近できた千住博という方の美術館は、今非常に有名な西沢立衛の設計だと聞いています。単なる守る事だけではなく、今の時代に何を新しくつくり、何を残すか、ということについては、やはり考えていく必要があるのではないかと思っています。

私は、現在、観光地の発展と衰退という研究テーマで、観光地の価値とは一体何なのか、なぜ観光地は発展したり、衰退するのかというようなことを主に研究をしています。その価値はどういう原因で増えたり、減ったりするのかを考えるにあたり、軽井沢は大変おもしろいフィールドだと感じています。いろいろ勉強させていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

中村委員長：

それでは横島先生よろしくお願いします。

横島委員：

横島です。私は専門性のないジャーナリストのOBです。今回、軽井沢町から行政のお手伝いとしても一つ目の大きい仕事として、今回仕掛けのにやらせていただいた立場で、願いをしておいた方が良いかと思う点を手短にご説明させていただきます。

各先生方のご意見、すごくごもっともであると思います。しかし一つ、今回は行政事業なので、時間的な制約があります。深い議論をすると同時に具体的な議論を、タイムスケジュールの中で乗せて進めていく事も、外さない事として視野の中に入れておいて頂きたい。その時のために、少し乱暴ですが、町の皆さん、町長以下皆さんと、いろいろな場で、いろいろなお話をされていて、今軽井沢町はこう考えているのではないかと、という私の考えをお話しさせていただきます。

軽井沢町は既にオーバーユースだと、スポーツ避暑地、ショッピングセンターとしてもオーバーユースなのだと、限界は超えていると考えていらっしゃるようで、これ以上発展しないで持続するにはどうすれば良いか、という事の答えがほしいのではないかと考えています。あるいはもしお求めになってないなら、求めて頂きたいというぐらいに私は考えております。

既に都市として開発が終わり、発展がしつくし、ある意味では成長の限界まで見えてきた今、軽井沢町はそろそろ縮退の時代に入って来るのではないかと、日本全体が都市の縮退時代と言われているのですが、この先端として別荘保養地の縮退のモデルが軽井沢ではないかと思うと、縮退して維持するための一つの要素は、成長は止まるけれども、成熟はしていかなければならないと、つまり、止まった成長の後に、どういう成熟性を持たせるか、という事について知見を頂きたいと思っています。それが100年先の一つの実像として見れば、なおのこと結構ですが、それはある意味理想像でも良いので

はないかと思えます。花里先生がフォアキャストを主張しとおっしゃいましたが、歴史でひっくり返せば100年、フォアキャストすれば、歴史から得られる100年先もあります。しかし歴史を飛び越えた、ある種の未来学的な100年もあります。そういう意味で言うと、アベノミクスが3本の矢ですが、軽井沢メソッドは2本の違う矢を用意しなければならないと思っています。つまり歴史から見る将来性と、それらを離れた、日本の将来に適合した人口縮小時代の100年後の日本もモデルとしての地域というものの、2本の違う矢を同時にお願いするような宿題になっているのかもしれない。うまくいかないかもしれません。しかし振り返れば未来というのは、木村尚三郎さんの名言ですが、振り返りつつ、思い切った未来像を描いてみる、そこには各論ではなくて、総論がいるのだろうと思います。中村先生にもお願いしていますが、先生方にもカテゴリーキラーになって頂きたい。ご専門の領域をいくら論じられても、2時間でも5時間でもお得意だと思います。それよりはむしろ隣の領域に手を突っ込んで頂きたい、人の領域を荒らして、そのお互いの荒らし合いの中から、新しい知見が出て来るのではないか、そんなことを実はお願いしたいと思っています。ただそれはその通りいかないです。余計なお願いだったり、無理なお願いであることは100も承知ですが、どうかその辺のところを心得て頂いて、なおかつ最初の1年で粗々の議論を済ませ、2年目では絵を描きたいと考えています。

分厚い報告書はいりません。皆さんに別の機会に詳しくご説明できると思いますが、分厚い報告紹介を何冊積み上げて、役所の棚で埃かぶるに決まっています。それは辞めようと、紙は薄くて良いので、絵にしよう、モデルにしよう、模型にしようと思っています。この事はこの事業の最大の手法となります。そのためには、2年度目は、この様な全体会議ではなく、ワーキンググループになるかもしれません。お願いは2年と言いたいのですが、1年で大議論は辞めて、2年目は各論に入るのかもしれないし、1年目で総論と各論を平行して議論するかもしれません。異例な委員会になっておりますし、異例なお願いになっております。求める答えも異例ですから、異色づくめではありますけれども、その辺の先端性、時代性と言いましょか、中村委員長の言われる「日本のモデル」だということに実は思いがこもっているわけがございます。ぜひその辺をご理解いただいて、ご協力いただきたい。いきなり肩に力に入ったようなお願いをしてしまいましたけれども、ご理解を賜ればと思います。よろしくお願い致します。

中村委員長：

町のお考えは、よく分かっております。藤巻町長、その他、ご意見や補足等はございますか。

藤巻委員：

先程、横島先生がおっしゃった様に、未来に何を残していくかという事だと思います。軽井沢で作るものは、本物を作っていかなければならないと思っています。先程、進士先生からこの建物の屋根は合板であるご指摘頂きましたが、やはり本物で作っていかなければならないと思っています。もう一方では町の経済という事もあり、経済の力がなければ、良いものは作れないという事があります。町の方は固定資産税の交付団体になっていますが、一方で、町民の生活が豊かなのかと言えば、そう豊かではない。夏にお客さんが来て、お金を落としていく、それを年間で回していく事の繰り返している町でもあります。そういう経済の中で、本当に本物が作れるのかという事は、不安材料としてはあるのですが、きちんとその時代を記す良いものを作れるときに、作っていく事は大事なのかなと思います。

中村委員長：

どうもありがとうございます。私も一つ申し上げることになるのですが、事務局の作ってくれたプログラムですと、そろそろ休憩時間でございます。休憩時間挟んでパネルディスカッションを40分用意してありますので、私はそちらの冒頭でお話をしようかと思っています。最初の自己紹介にしては意外に熱っぽくなってしまいましたので、しばらく休憩時間をとります。よろしくお願いします。

事務局 (udc)：

それでは、20分程休憩をとりたいと思います。

本日は、タリアセンの園内を入園料なしで入れる事になっております。お時間が短いかと思いますが、園内散策等をお楽しみいただければと思います。

意見交換（フリーディスカッション）

中村委員長：

皆さんからの自己紹介を兼ねて、自己紹介の枠を大きく超えて様々な意見を頂きました。さすがに核心に触れるご意見が多く、議事録をとって頂きますので、これからの本番に役立てたいと思います。少々時間を40分ぐらい頂いておりますので、皆さんのお話の補足、あるいはご意見を頂きたいと思います。

私から一言お話ししたいと思います。始まったばかりですので、今日は全くフリーハンドで参りましたが、ある程度絵という程ではないですが、考え方について皆さんの意見を聞きたいと思います。

「原点回帰」ということ申し上げましたが、具体的に何を意味するかという話を申し上げてようと思います。

この町は「自然保護要綱」を持っています。私も最初は知らなかったのですが、勉強するにつれて、非常に驚いたのですが、自然保護を支えてきた町民、別荘住民、その方々のパブリックコメントを見ましたが、自然保護に対する意識が非常に強いという事は明らかです。ただ問題なのは、自然保護って一体何なのかという議論です。高度成長で自然を壊した時期に、逆に出てきたのがこの自然保護という言葉です。その内容をもう少し成熟させる必要があるかと思っています。原点回帰が歴史だという横島さんのお話は、私も全く同感です。木村尚三郎さんの事は、多少ほんとは入り口だけですが勉強しました。

自然保護に関して調べてみると、軽井沢の原風景は高原なので、基本的には草、草地であります。それから湿地帯です。この草地も湿地帯も非常に減少しており、危機的な状態です。特に湿地は非常に減っていると思います。

もう1点、この町の自然保護という時に、頭に浮かぶ一つ例として「カラマツ林」があります。全てとは申し上げませんが、多くの部分が明治の中期以降の人工造林です。それを永遠と続けていった経緯がございます。北原白秋が大正の中くらいに中軽井沢で「カラマツ林」の歌を作っています。この様に文学者が、自然を言葉にした瞬間に原風景という、ふるさと性が出てくると私は思います。人工造林ではあるが、第2のふるさとだという事も、また事実です。

そういう事を考えながら、もう一つ前の原風景は何だろうと少し考えてみました。たまたま目に付いたのですが、林野庁の中部森林管理局が作成した「千曲川上流の森林に対する将来計画」というものがあります。国有林地帯の話ですから、下流の方は別ですが、国有林については、今後、混交林の方向に誘導するようです。混交林というのはミズナ、ハルニレ、ブナです。この様な混交林で順次誘

導したいというのが国の方針のようです。ですから、これは、生物多様性になるかどうか分かりませんが、「ふるさと性」というものに対する一つの問題提起だと思います。カラマツに関して、今後どういうふうを考えていくかという事の論点になるかだと思います。

もう一つは、共同的生態系とでも言いましょうか、長い間作られてきた生態系にもう少し注意をしていく必要があります、カラマツ林というものを、必ずしも絶対視しないということです。注意深くこの辺りの内容を再検討するというのが一つあります。

もう一つは、これも木村さんの著書に出てくる言葉ですが、今後、社会が激変していく中で、どんどん人間が土から離れている「土離れ」という事が、今の文明の一つの大きな特長であります、農業的人間風景は、絶対手放してはならないという事が彼の主張であり、私も同感です。農業的人間風景というのは、全員が農業するという事のような簡単な事ではもちろんないです。土から離れるということに対する危機感というのを、何らかの形で表現しておく必要があるのではないかと思います。

ですから第1の問題は自然保護という言葉で表されていることについて、人間が大地から離れないという、大地に対してどういう見方をするかという、大地という指摘のキーワードが考えられると思います。

もちろん原点回帰という意味では、人間というのは、要するに大地の上に二本足で立つという、そういう人間の身体というのが基本な事です。人間の身体と大地というキーワードが挙げられると思います。やはり、大地の持っている複雑性とか豊かさは、人間の身体で接触する時にしかつかめる事ができないという考え方です。これは人間の身体という事がキーワードだと思います。これも考えてみれば、身体はもっとも身近な自然であります。やはり自然がキーワードになるのですが、もう一つは人間の身体が持っている精神性という事です。非常に高いところを目指すという事、土に回帰していくという事、二つ持っているのが人間の身体です。それをどうするかを検討する必要があります。

今日はスポーツご専門の黒須先生からお話しありました様に、大地にどう関わっていくのかという事として非常に分かりやすいものはスポーツであります。農業もそうです。この町でも、マラソン大会やサイクリング等のイベントもあります。アイスアリーナのような室内競技もありますし、ゴルフやテニス等の屋外スポーツ、様々なスポーツがあります。ゴルフは様々なところで、批判や議論がありますが、本来ゴルフが持っている不確定性の大地の中で人間の身体を遊ばせるという事は、素晴らしい発想だと思います。ただ、それが行き過ぎたり、頂上主義的になってきた事でゆがめられたが、大地と人間の接触の仕方という本来の原理だけ考えると私は素晴らしいと思います。

これも先生からお話でしたが、スポーツも1人でやるとは限らないので、みんなが集まってコミュニティーというのが生まれる事があります。この町の歴史をひもといて見ると、先程、避暑団の話がでてきましたが、この様な団体がたくさんあります。現在も軽井沢会として存在しますし、軽井沢別荘団体連合会という団体もあり、文化人コロニーか、あるいはそれに類するようなものになると思います。そういうような中で、われわれの記憶に非常に印象的なのは、文学者が作った軽井沢の精神風土というものです。三笠ホテルを中心に、盛んに白樺の人たちが集まったと聞いております。この様な精神風土を作ってきた、一種のサロンの機能がこの町にあり、それが精神文化を作っていたと思います。その様なサロンの性格のものをどう受け継いでいくのか、今の大衆的観光に一番欠けている事は、そういう点ではないかと思うので、その伝統をどう引き継いで、新しい形でどう表現していくかが課題になると思います。例えば町の中にもう少しサロンの性格を持った広場を作る事もあり得るわけです。一つの希望ですが、農業にしても、スポーツにしても、あるいはそれがアー

トにしても、観光にしても、今後の100年を考えた時に、人間のきずなを最初に考える必要があり、そういう風なものをどうしていくべきかという問題に対しての解答をこの会議は求められていると思います。横島先生がおっしゃった様に、これも過去を振り返ることによって、自然に出てくる感じの伝統だと思えます。別荘型コミュニティーという性質を取り入れて、どう新しいコミュニティーを作り上げていくかという問題もあると思います。現在は、町民の方が作っている「区長会」という集落単位の自治組織があります。ゴミの処理はほとんどの組織で行います。この様な自治組織と、別荘族間のコミュニケーションは、必ずしも上手くいっているわけではありません。いずれにしても、コミュニティーの問題をどうするかは、非常に重要であります。過去の軽井沢が作ってきたコミュニティー文化、人と人のつながりを作る文化と非常にかかわりがあるので、やはり過去から学んだ将来という事を考えるべきだと思います。

大きく分けると以上のような事になります。「大地」との接触、「人間の身体」という原点と、「人間の絆」等を考えていますが、考える中で、大体全てがオーバーラップしてくると思います。一つだけ単体で出るということはあまりないと思います。この様に考えていったらどうかと、今のところは何となくですが考えています。

最終的には、第一歩をどう踏み出すかというところも、できれば議論していきたいと思っています。

後30分ぐらい時間がございまして、先程、あまり時間がなかったので、途中でディスカッションを強引に打ち切ったようなところもございまして、その続きでも結構ですし、新しい話題でも構いません。ですが、どうぞご自由にご発言頂ければと思います。

花里委員：

私から二つ程あります。一つは、昭和26年の国際親善文化観光都市建設法が一つのキーワードになると考えています。国際学会とか、あるいは国際会議みたいなものを開催できる場所を用意し、都市計画を含めてきっちり整理する事で、文化観光都市建設法制定という事に関しても、かなっていく気がしています。

中村委員長：

これは事務局から詳しくご説明頂きたいと思います。

軽井沢町（森室長）：

国際親善文化観光都市建設法は、根底には戦後の復興があったと思うのですが、軽井沢町含めて、日光、軽井沢、熱海、伊東、鳥羽、芦屋、京都、奈良、松江、松山、別府と長崎の都市で制定されています。連盟を作っており、意見交換をしたり、防災教育で結んだりという活動も行っているのですが、実際その建設法があるからといって、国の補助金が出るという事ではないです。町としては、軽井沢のためだけに法律を作ってくれたというステータスもありますし、重んじているものがあるかと思えます。

進士委員：

軽井沢のためだけなのですか？

軽井沢町（森室長）：

京都は京都で京都建設法を制定しています。都市別の特別法になります。別府だと温泉都市建設法として制定されています。

進士委員：

それは、すごいですね。中身は各都市で違うのですか？

横島委員：

タイトルは全部違います。交流、連携、文化、環境等を組み合わせて特別法を個々の都市に授けて元気に頑張っていこうという内容になっています。

進士委員：

それはむしろ特別都市計画法みたいなものですか。

軽井沢町（森室長）：

そういうことです。

進士委員：

それ何年の事ですか？

軽井沢町（森室長）：

昭和 26 年です。

中村委員長：

原形になる法ですが、既に忘れている。

軽井沢町（森室長）：

みんな知らないです。

中村委員長：

新しい息吹を吹き込んだらどうかと考えています。

進士委員：

私はそんなに大した事ではないと思っています。戦後復興で観光立国をしなければならなかったただけだと思います。

安島委員：

戦争が終わって様々な日本の生産設備が全て破壊されてしまい、観光しかないと考え始めたのですが、法律等が出来てスタートしようとした時に、今度は朝鮮戦争が始まり、それで日本は一気に回復するわけです。そこで、観光よりも、やはり工業立国に一気に傾いたのではないかと思います。

今から考えると、この当時は中国、韓国との国交もないし、海外旅行の自由化もされていなかったのも、もし観光立国しても、あまりに大きな効果はなかったのではないかと思います。アメリカとかヨーロッパとかっていうところを狙ったのだと思いますが、多分そんなに大きな効果はなかったと思います。

進士委員：

今からもう 1 度復活させる意味は何ですか？

中村委員長：

折角、法律という器があるわけですから、それを新しく解釈し直して活用した方が良いと思っている。

横島委員：

たまたま時を同じくして、別府市と京都市がその法律を論拠にしながら、平成の復活を図ろうと、60 年目に再起用しようとしています。別府が「未来温泉都市未来構想」、京都は「2040 京都ビジョン」、やはり同じような事を 60 年後にもう 1 回やってみようと思っているようです。軽井沢町と同じタイミングで動きだしています。ですから、その法律を一つの論拠にしながら、力はない法律ですが、精神

的立脚はあるだろうという思いがあります。

進士委員：

歴史を語る時の、一つのファクトだと思うが、先程の話と違うのではないかと思います。そんな事にこだわっているのは、もう落ちぶれた都じゃないですか。

横島委員：

それは、落ちぶれていると思います。別府も京都も元気になるための方法だと思います。経済的に観光客を増やそうという計画です。

進士委員：

軽井沢は違うと思っています。

横島委員：

軽井沢は同じ法律をバネにはするが、ほんとの意味の文化的な完熟都市を目指そうといった方に方向転換をしたいと考えています。しかし、きっかけは一緒かなと思っています。

安島委員：

今年、海外からのインバウンドが、何もなければ間違いなく 1000 万を超えます。次の目標は 2000 万であり、東アジアの国の人たちがたくさん来るということは間違いのないのです。この様な状況とどう付き合っていくのかとか、新しい時代の方針といいますか、考え方という事は必ず必要になると思います。

中村委員長：

観光をもっている量的拡大というふうに考えると、時代遅れです。ですが、新しいタイプの、むしろ文明のあり方をさぐるという事が我々の目標ですから、そういうときに役立つものは何でも使ったら良いのではないかと思います。

進士委員：

使う事は反対ではないが、そういうものに頼るような論の立て方でない方が、先生が冒頭で言われた考えに、むしろ近いと思います。戦後復興を行う時には、みんな最初は観光から始めるわけであり、これだけ多くの財産があるのだから、それに乗っからなくても良いと思う。

今のインバウンドに関しても、やたら来なくて良い町にしたほうが良い。

安島委員：

それとは別に、来なくて良いと言っても来るわけです。その時の付き合い方をどうするかは考えておかないとならないと思います。

中村委員長：

もう既にたくさん来ている。

進士委員：

先生に悪いのですが、マンションも全面禁止にした方が良い。どうしても建設するならエリアを決めて、少なくとも鉄道からまず見えない、主要道路からも見えない様などしようもない場所なら良いという様にした方が良い。

花里委員：

私も個人的に賛成します。

進士委員：

何のためにリゾート開発するのかという時に、首都圏はマンションだらけなわけです。そこにいる

連中がなぜわざわざ軽井沢に来て、マンションを楽しみたいのか、結局向こうに入れない、つまり二流の住人を抱えることになると思います。私は住む機会がないから言っているのだけど、辞めた方が良い。

横島委員：

一流か二流かっていうグレードは別にして、その通りだと思います。

本当の別荘から見れば、違う事は事実です。軽井沢の人を高めるか、高めないかっていうと、高めないと思います。ただ、必要な事は、土地の利用規制を厳しくすると、コモディティで抑えられるところは、受け皿特定主義でいかないと乱開発になってしまう。そういう意味では、土地の利用規制がまだ甘く、自然保護対策要綱でも守り切れてない乱開発が現実にあるわけです。その事は、中村先生とも議論しましたが、宅地規制は必要だと思います。

進士委員：

少なくとも用途地域は、日本共通の都市計画の用途地域で区分しているようでは、全くビジョンが描けない。だから、軽井沢固有の用途地域規制をきっちりやらなければならない。

それから容積と建ぺい率で決めるような事は、結局、道路幅で決まったりしてくるため、ナンセンスです。土地は、窪地で外から見えない場所とオープンで眺望の良い広々とした場所では違うが、その土地のポテンシャルを生かすという発想がありません。都市計画で言えば、地区計画の様に、土地のポテンシャルを生かし、細かく、丁寧にデザインレベルまで行う事は、2万や3万の都市ならやれるはずで、今までも私権制限がやり過ぎではないかと地権者から突き上げられているだろうから、今までの取組みは否定してないです。今まで努力されてないとは言わない。しかし、100年先を見ると言うならば、もう人口は落ちているから、開発圧力で、もっと私権を制限する事にはならないと思います。トータルな価値で勝負する時代になると思います。

横島委員：

仮説ですが、新規の別荘宅地は開発規制すると言った時に、どうなるかという議論から入っていくと、実現可能な現実論が出てくると思います。そういう議論はして頂きたい。

進士委員：

私は、実現可能だと思っているから発言しています。場所を選んで規制する必要があります。軽井沢でも全員が別荘族ではなく、そこにサービスをする仕事もあります。ですから、全部戸建ての別荘形式でなくてはならないとは思っていません。ただ、目的的にマンションで住むというのは、湯沢と同じになってしまう。

花里委員：

マンションは結構高くなっています。例えばマンションの4000万とか、4500万の値段だとすると、3000万円ぐらいしかなくても手に入れる事が出来ます。マンションももちろん問題かもしれないが、むしろ問題は、区画が小さくなっている事です。

進士委員：

区画が問題ですね。

花里委員：

小割別荘地が出てきてしまっています。

進士委員：

それは宅地規制をしていないからです。

花里委員：

それは先程ご説明があった、赤色で塗られた地域に結構多いで出来ていると思います。

進士委員：

近隣商業地なら仕方ないと思います。

中村委員長：

いずれにしても、現在の都市計画法を超えるようなものを、ある程度構想しなければならないと思っています。昔から言われているように日本の都市計画法だけでは上手くいきません。自治体も法定都市計画ではなく、法外都市計画が必要だと思っているはずです。

進士委員：

現在は、自治体で行う事はできますよね。

中村委員長：

現在は、かなり法外で出だしている。その出発点としてできれば良いと思っている。

横島委員：

恐らく総務省とたたき合いになるかもしれないが、別荘開発規制条例は上書き上で作る事ができません。

進士委員：

先程言っていたメソッドは何ですか？

横島委員：

二つあります。軽井沢メソッドです。

進士委員：

軽井沢メソッドとは何ですか？

横島委員：

簡単に言えば、マンションは3階建て以上、作らせないという話です。

進士委員：

メソッドっていうのは保護法のことですか？要するにそれは規制ではないと思います。

横島委員：

規制になっています。

進士委員：

規制と言わなければ良いと思う。軽井沢の100年ビジョンで、まずマスタープラン作り、細かく地域のポテンシャルを決め、把握し、それに応じたあり方を検討する必要があると思います。少なくとも用途地域が2、3色で終わる等という計画はあり得ないと思います。やはり10色以上にしないと、その土地の特性が出て来ないと思います。湿っぽい場所もあれば、草地で乾燥したりしている場所もあります、地形もそれぞれ変化があります。そこを丁寧にやれば、10色以上にはなると思います。その地域毎に使い勝手が違うという話になれば、納得できると思います。

横島委員：

それはそうです。ただ、これから先20～30年後には人口が減り、2200年には人口が半分になります。そのときに軽井沢の1万5000の別荘が増えているか、減っているかっていう想定もいるわけです。人口半分になって、別荘が増えるわけではないと思っています。

進士委員：

別荘という形かどうかは別として、減っていると思います。大学では、学生の人口が減るから、もう大学は駄目だって言う議論が多く出ますが、それは駄目な学校が無くなるだけです。それと同じで、そんな時に一緒に減るような町を作るなら、もう100年計画の意味はないと思っています。

横島委員：

しかし、半減は、驚天動地の人口動態の変化です。別荘も相当影響を受けると思います。

進士委員：

逆に、団塊の世代が入ってきていると言っていました、それらの面倒で金が掛かる時代が来るので、そういう人口予測をちゃんとしておかないと駄目だと思います。

横島委員：

もう一つ、2代目、3代目がマンションになると、おじいさん、おばあさんの時代の別荘が必要なくなると思います。そういう別荘地が出てくると思います。そのときの変化をどう読んでいくかという事が実は別荘マネジメントの最大の要件です。そこが難しいと思います。

進士委員：

それはそうだと思います。

中村委員長：

日本全体の対局的なトレンドはもちろん大事ですが、特殊な動向は必ずしも、それは違うのではないかと思います。

進士委員：

全国的に様々な自治体と付き合っていますが、本当に何もやっていません。大した事のない事例を出して説明している、こういうものを見ていると、みんなどこも駄目だと思います。

中村委員長：

そういうラジカルな議論をする場所がないから、ここでは、やって頂ければと思います。

やはり集合住宅といっても、今のマンションを頭に描いて良いかどうかというのは問題があると思っている。様々なライフスタイルがあれば、違う形が出てくるかもしれません。今、既に東京に1週間通勤だとか、軽井沢にいてたまに東京へ仕事に行くとか、たくさん出てくると思います。軽井沢は、そういう意味では現に魅力的な場所になっています。そういう人たちの身の置き所は、どういう形なのかという事も議論したいと思っています。それで結果として地域の議論になればと思います。

進士委員：

全減はさせなくて良いのだが、なるべく目立つ場所は今から規制しないと、全体の財産価値を下げたしまう。

中村委員長：

自己抑制的なスタンスでやっておけば間違いないと思いますが、はっきり焦点が決まってないところがあります。

横島委員：

福祉型別荘も出てきています。自分たちが元気なうちはそれでやるが、駄目になったらケアしてもらうという様にリロケーションできるような別荘があります。越後湯沢では老人のためのリタイアハウス等を導入し、ゴーストタウンから復活しています。

進士委員：

農家・戸建てではやっていけないので、マンションに入るというケースの様である。雪かきする必要がない事も大きいと思います。

中村委員長：

軽井沢も新しい福祉施設、「木もれ陽の里」があります。将来の福祉、健康、そういうコンプレックスがここでできる可能性もあります。高度医療という観点も少し視野に置いて見ていただきたいと思います。この会議で、現地を詳しく見てもらおう機会を設けようと思っています。なるべく早く、夏休みの間に見ていただくような形が良いと思うが、事務局としてはどう考えていますか？

横島委員：

木もれ陽の里で1回会議を開く様に、会場設定しようと思っているのですが、冬場を予定していません。

もう一つ、黒須先生にお願いしたいポイントとして、スポーツタウンという生き方はないのかという事です。つまり、夏のスポーツ学校として日本中の若い者が軽井沢に集まってくるような事が有り得るのでしょうか。別荘のおじいさん、おばあさんの次なる別荘対象者が誰になるかというのと、二つぐらい若返る世代が出てくるかもしれません。その人たちはマンション型のほうがいいって言うかもしれません。その時に先程の進士先生の意見は非常に劣悪な状況に置かれてあるかもしれない。

進士委員：

菅平が昔そうでしたね。今はどうなっていますか？

横島委員：

菅平はラグビーの試合ができなくなったので、駄目になってしまいました。早稲田だけ残っていたのですが、対抗するチームが秋田県か岩手県だかに移ってしまったために軽井沢は駄目になってしまいました。

進士委員：

今はどこで合宿しているのですか？

黒須委員：

まずはその少子化で、ラグビーのチームそのものを結集する事が難しくなりました。おっしゃっていただいたように、そこに集まる価値というのは同等のレベルの人たちが試合をできるということです。その話を聞いて、また違う大学が集まってくるという、そういう仕掛けを作るかどうかという事ですので、菅平の場合は今のところ少し落ち目になってきているというのは話としては聞いています。

中村委員長：

軽井沢は、一言で言っても、意外と可能性があるのです。裏の方は森林だったり、特に南西部は農村地帯になっています。そういう所をよく見て、知ってから議論した方が良いと思いますが、なるべく早く進士先生にプレゼンテーションをお願いしたいと思います。進士先生は7月具合悪いのですよね。

事務局 (udc)：

次回は7月22日です。

中村委員長：

22日は、予定は通り会議を開催しますが、それとは別に、現地見学会を開催したいと思っています。

横島委員：

たくさん見学会を行う事は出来ません。どこかの会議をはずし、現地だけ見る日を1回入れようかと思っています。その時まとめ見る方向としたいです。見学場所をどこにするかは、委員長を含め、今後検討を行う予定です。

進士委員：

どこと、どこという様に場所を限定するのではなく、全部走ってしまえば良いのではないのでしょうか。一個、一個と言わないで、全体の見た目が大事だと思う。

中村委員長：

1日、朝から晩まで時間があれば、大体見られると思いますが、かなり広いと思います。

花里委員：

これが建築家の別荘ですと言って、5、6軒周るだけでも半日かかりました。

進士委員：

そういう見方は時間がかかると思います。しかし、何色に分かれるかと言う違いを見たいだけです。

横島委員：

この委員会には、5つのエリアデザインをお願いしています。5つのエリアデザインの概念についても入れて頂きたい。トータルのグラウンドデザインを描くと同時に、5つのブロック別のイメージ図作成も一緒にお願いしたいと思っています。その5つの土地を選別させて見てらっしゃらないと思いますので、5カ所見ていただく時期が早めに必要だと思っています。新軽井沢、旧軽井沢、中軽井沢、追分、それから南軽井沢というその他の地域になります。ですから1回は、1日使ってぐるっと回って頂きたいと思っています。

中村委員長：

それではちょうど今進行上で言いますと、事務局から今後の進行の入れ方や企画の説明がありますので、今の話に含めて20分程で説明して頂きたいと思っています。

企画説明（事務局：udc/小野寺事務所）

中村委員長：

ありがとうございます。随分たくさん説明がありましたが、よく見ると実はそれほど細かくなく、皆さんの意見に応じて方向、方法が柔軟に変わるという様な進め方になると、私は理解しております。

事務局（udc）：

ちなみにお手元に資料2がございます。今年度、例えばこんな形で進めてはどうか、という一つのご提案を提示しています。例えば未来構想会議で毎回お一方にプレゼンテーションを頂き、それについてみんなで議論するというやり方です。しかし、月一になると、今年度プレゼンテーションのみで終わるので、毎回一方なのか、ある時はお二方、ということもあるかもしれません。この辺もどうぞご議論いただければと思います。

中村委員長：

進め方についても、一応皆さんの議論を聞いた上で、少し方向を考えなければならないと思っています。いずれにしても、小野寺さんからご説明がありましたように、委員長、副委員長、それと事務局を含めて「幹事会」を構成させて頂きたいと思っています。随時課題に応じて、委員の皆さんにも入

って頂きたいと思いますが、基本的には幹事会を開催し、舵取りをしながら進めていきたいと思っています。

資料2の1頁に、これからのスケジュールが書いてありますが、資料内では、会毎にプレゼン1人する事になっているが、2人ずつ行い、12月までに全部終わらせ、その後自由に議論する方向が良いのと、私は感じています。その辺は変わるかもしれません。途中で現場視察をやっていただきたいので、それを割り当てるかもしれません。

現場視察の日程等について、事務局と幹事会で議論して、原案を作って皆さんに見て頂こうと思っています。

次回、7月22日は進士先生のご都合が悪いということですので、進士先生以外のプレゼンを考えたいと思います

事務局 (udc) :

進士先生、2時半であれば大丈夫という様に事務局では聞いています。

中村委員長 :

割り当てについての原案は幹事会で議論して作成するようにします。

これから監事会で私からあらためて発言致しますけれども、それから今日議論したことで、やはり100年見据えるためには、歴史の総括が必要です。これはしっかりやらなければならないと思っています。例えば大正時代のこれは一体何を意味するのか、明治時代の調査は一体何であったのかという様な歴史を総括して、意味付けをしてみたらどうかと思います。そうすることによって今後の100年がどういう時代かっていうことを提示することができると思います。概括的な目標は既に町にあると思いますが、我々なりの歴史を総括したいと思っています。まとまった頃に皆さんにご提示したいと思っています。

もう一つ、先進地視察も予定に入れております。これは要するに場所によっては寒いときのほうが良いのですが、どこに行くかまだ決まっていません。海外には参考になるほどのレベルの高いところは出てまいりますが、国内では実はそんなに多くないのではないかと思います。倉敷なんかは戦前から勉強会をやっています。金山は、街並み景観に力をいれ、和風住宅をやっているのですが、林業をちゃんとやっていて、それからその大工さんの職人養成ともリンクしているというような、ただ形を整えるという考え方ではないです。この様な場所がありますが、皆様の意見等がございましたら、お教えいただければと思います。また、今の事務局のご説明に関しては、何かご意見ございましたらお願いします。

進士委員 :

農業景観という言葉だけやめてもらいたい。未来構想なので、それに関する話をしたいと思っている。先進地の話もそうだけど、どうも古典的だよね。

中村委員長 :

進士先生のこのタイトルですね。

進士委員 :

先進地がないからやるのではないかと思います。

私が農業大学だと「農業景観」にする、その発想が駄目だと言っているわけです。

事務局 (udc) :

分かりました。

進士委員：

今の話を聞いていて、100年計画するという話になってないのではと思いました。私のタイトルだけでなく、先進地という事もそうです。先進地という事は、どこか進んでいる所があり、またそれを追っ掛けるみたいに見えます。中村先生が言われた、パースで、こういう所がおもしろくやっている例はあるっていうのはたくさんあります。ですが、トータルには、軽井沢が先進地にならないわけでは

横島委員：

7月22日は進士先生、欠席扱いになっているのですが、出られますか？2時半から可能であれば、前半と後半に分けて、お二人ずつのスピーカーという設定ならば、22日に先生に入っていただくのがいいのかなとは思っています。それは変更しませんね。22日欠席でよろしいですね。その場合には花里先生に、歴史検証を入れていただきたい。森山先生の風土デザインはよろしいですか。

森山委員：

良くないです。これは中村先生のテーマで、私は風土とデザインなんて事はやっていません。

進士委員：

これは一人一人が思っていることを話せば良いのですね。

横島委員：

お名前をお借りするときに、何もタイトルなしでは失礼だという趣旨のタイトルですから、内容をご自由で構いません。

森山委員：

私が冒頭でやるような立場ではないので後ろにして頂きたい。

横島委員：

花里先生は、一番軽井沢に詳しく、ご縁も深い事から、7月の第1トップバッターやっていたければと思います。

花里委員：

分かりました。

事務局 (udc)：

もしタイトルを頂ければ、調整させていただきます。

横島委員：

中村先生の意見では、プレゼンを毎会お二人ずつ行った方が、議論のタイミングを取れるのではという事ですから、その方向を基本として事務局でスケジュール調整をお願いします。

花里委員：

プレゼンの時間は何分ですか？

横島委員：

30分のスピーチに30分の議論を付けて、1時間ずつで如何でしょうか。

進士委員：

これはその時に思い付いたことを話せば良いのですよね。メモを作成する必要があるのですか？

中村委員長：

箇条書きには書いて頂いた方が良いでしょうが、むしろぶっつけ本番の方が進士さんの思っている事を

話せるのであれば、どちらでも構いません。

横島委員：

しかし、箇条書きでもレジュメは提出して頂きたい。

中村委員長：

それでは、脱線しても構いませんが、レジュメは提出してください。

横島委員：

7月22日、進士先生よろしいでしょうか？

進士委員：

遅刻して良いのですよね。

横島委員：

2時半に来ていただければ構いません。

中村委員長：

進士さんの話は早く聞いておいた方が良くと思っています。

横島委員：

会議に役場の会議室は使いません。今日はこの会場ですが、次回もどこか由緒ある場所を事務局が準備しています。必ずどこか思いのある場所で、座っていただいて議論して頂きたいと思っています。

進士委員：

こういう雰囲気のところだから、いろんなことを言いたくなってしまった。発想が出るのだと思います。

横島委員：

次回予定では、千ヶ滝という別荘地にある、大手企業の大きなお部屋をお借りして、ちょっと変わった雰囲気の中で議論して頂きたいと考えています。

中村委員長：

それまでに現地視察が入るかもしれないのですかね。

横島委員：

差し上げているスケジュールの基本は町長のスケジュールに合わせてあります。恐縮ですが、1日町長の時間が取れるところを取らせて頂いております。この日程は動かさずに固定的とお考え頂きたいと思っています。9月は議会の都合で町長にどうしても都合がつかないのですが、その月に視察という手もあるかと思っています。非常に合理的に処理できます。9月に視察をする方向で調整して頂きたいと思っています。

中村委員長：

随時引き続き先生方には調整させて頂く事になるかと思いますが、宜しくお願い致します。

ちょうど10分過ぎたところでございますが、長時間どうもありがとうございました。では事務局にお返しします。

事務局 (udc)：

それでは次回の第2回委員会は7月22日の1時半から開催させていただきます。会場が決まりましたら、事務局のほうから委員の皆さまにご連絡させていただきますので、よろしくお願い致します。

それでは以上をもちまして、第1回軽井沢未来構想会議を閉会致します。長時間にわたりありがとうございました。

(以上)